

「生物種」としての人間の捉え方と実践的合理性

河田健太郎

(武蔵野大学教養教育リサーチセンター客員研究員)

フットの最後の著作である *Natural Goodness* は、道徳的な善を人間という「生物種」の特性に照らして客観的かつ実在的に理解する試みである。それゆえ、ここでの道徳的な善は、人間以外の生物種における善さ、欠陥と類比的に論じられる。ある生物種に属する個々の生物は、その生物種の自然史から導出される自然的規範の命題に従って欠陥をもっていたり卓越していたりすると判断されるが、それと同様に個々の人間も、人間という種の自然的規範の命題に従って、欠陥や卓越性があると、さらには道徳的に善あるいは悪であると判断されるのである。

人間以外の生き物と類比的に生物種としての人間の自然的な善さを論じるということは、アリストテレスが *flourishing* ということで述べているものの内容を生物学的探究によって規定し、そこに基盤を置いた拡張版として人間種について論じることのようにも考えられる。すると、フットが人間の特性として認める実践的合理性も、生物共通の目的とされる自己維持と生殖に寄与する一特性とみなされることになるだろう。しかし、フットは、*flourishing* の内容を固定しておらず、そして実践的合理性を生物種に相対的なものとみなしているとする論者も一方に存在する (Thompson, 2003, 2004, Hacker-Wright, 2009, 2013)。こうした論者によれば、人間が合理的動物であるということは、合理的存在者であるならばもつことのできる中立的な実践的合理性をもつというだけではなく、人間という生物種に特有の実践的合理性をもつということである。人間種に固有の *flourishing* に寄与する限りにおいて実践的合理性は自然的な善さとみなされるのであり、そうした善き実践的合理性の発揮に構成的なものとして、伝統的に徳目とみなされてきた正義や慈善はあるとするのである。

本発表では、こうした観点のもとフットの人間という生物種の捉え方、そこで考えられている実践的合理性について、生物学的な観点で述べられる道徳観と対比させながら考えたい。

Foot, Philippa, *Natural Goodness*, Oxford University Press, 2001.

Hacker-Wright, John, "What Is Natural About Foot's Ethical Naturalism?", *Ratio* 22, no.3, 2009, 308-21.

—— *Philippa Foot's Moral Thought*, Bloomsbury, 2013.

Thompson, Michael, "Three Degrees of Natural Goodness (Discussion note, Irede)", *Irede* (manuscript), 2003, <http://www.pitt.edu/~mthomps/three.pdf>.

—— "Apprehending Human Form", *Royal Institute of Philosophy Supplement* 54, 2004, 47-74.